ある。（ここには相談員が三名いるが、この外、熊本市福祉事務所に二名、八代市福祉事務所に二名の相談員が駐在して相談を受けている。）

ではここで、相談所の中を見てみよう。階下が事務室、相談室、食堂、浴場二階が一時保護室となつているが、建物が新しいせいもあろうが、素晴らしく感じが明るい。食堂や相談室には春の草花の植木鉢が飾られ、一寸した喫茶店だ。

二階の一時保護室――名前は厳めしいが青々とした畳、螢光灯のさがつた数奇屋風の天井、シャレタ模様の襖など小粋な割烹料理店といつた感じ。押入には真新しい毛布と布団が約四〇人分入待ち顔である。

★……一時保護室は清潔で美しい

相談に来た人は一時ここに泊つて今後の身のふり方をきめるのである。所長はじめ職員総がゝりで、帰郷や就職、結婚の世話は勿論、元の抱え主との前借金棒引の交渉や私物の引取りの交渉もやれば、子供を持つた婦人については福祉事務所へ連絡して生活扶助の手続をとつてやつたり、病気の人には医療券を発行して無料で入院もさせてやる……といつた具合に親身になつて熱心に世話をして呉れる。勿論この間食費など一切無料。

数日前退院して、今職を探しているYさんは「それはもう勿体ない位です。たゞで体の治療はして下さるし……どうして同じ店に働いていた友達も一しよに相談に来なかつたろうかと思います。今頃はどうしています事やら……」と云つている。

もつと利用して下さい
――残念な少い利用率――

だが利用率は少い。相談件数が三月二十六日現在で一八八件という少さである。

「三月十五日以降はどつと増えるつもりで、準備万端整えて待つていたんですがね。」と江口所長い残念そうだ。

「この相談所を、何か強制収容所みたいに誤解して居られるんぢやないでしようか。女の人達を雇いたいという申込みは三〇件以上も来ていますし、真面目な結婚申込みが一〇件も来ているのですからね。あれこれ迷わずに、どしどし相談に来て、一日も早く更生の道を歩まれるようおすゝめしますよ。」

所長がこう話される時、Y郡のある大衆食堂から葉書が舞い込んできた。〃お世話下さつたE子さんは、日一日と仕事にも馴れ、驚くほど真剣に頑張つています。真面目で性格も明るく、お客からも非常に好評です〃と。更に〃今後も又、一～二名お世話をお願いに参りたいと思います〃とも書き添えてあつた。

こうして、この相談所から巣立つて行つた人達は、例外なくその強い更生の意慾の故に雇主から喜ばれている。

山積する
求人・結婚申込み

求人表を見ると、食堂の九件（十七名）を筆頭に旅館四件（十三名）家庭の女中三件（三名）のほかパーマ見習、化粧品外交販売、食料品外交販売等合計二二件（四四名）という様に、全県下から申込みが来ている。

又、結婚申込みも「苦労してきた人こそ、腕をなくした僕の苦しみもわかち合え、片腕となつて生活を築いてゆけるでしよう。」という木土工事で片腕をなくした青年や「現在農業、更に果樹園をやりたい。母とも相談済です。」という青年、或は大分県からの申込みなど、どれをみても熱心で真面目な手紙ばかり。これは予想外であつた。だが相談所としては就職にせよ結婚にせよ、十分調査して万遺憾なきを期している事は云うまでもない。

だが、相談に来る婦人達の少いのは何

★……「これから美容師の免許をとるため勉強します」とKさんは朗らかである……

としても惜しい事である。一応帰郷してそれから相談に来る人もあるかもしれない。

又一面では、更生しようにも、経済的な問題などから、更生がなかなか難かしい境遇の人達も少くないであろう。そういう点から、相談所を訪れるまでに至らないのかもしれない。

だが、新しい時代の流れは、その人々に強く更生を求めている。やはり一度は相談所を訪れて新しい道を見出し、清く強く更生されるようおすゝめしたい。

帰郷したKさん

一時保護されている人で、家庭に親のある娘さん達は大てい帰郷してゆく。

その日もお母さんから一、五〇〇円送つてきたKさんは、所長室へ別れの挨拶に来た。「就職試験に落ちてグレたんです。もう人が何と云おうが、立派に立ち直つてきつとお礼に参りますよ。ここでの一週間で、身も心も生れ変つた様です。」と愉しそうだつた。

職員もまかないのオバさんも玄関に出て見送つた。駅まで送つてゆくU主事に伴われたKさんは、何度もふり返りふり返り手を振つて電車に乗り込んでいつた。

更生した人々に
もつと温い手を

Kさんを見送つた後、夕暮の迫つた所長室で、江口所長はこれら婦人の更生についてこう話された。

「これ迄多数の婦人達のお世話をして、夫々にこれ程こみ入つた境遇があるとは思いませんでした。一人一人が様々の境遇に苦しんでいたんですよ。それだけに問題の解決や再起も困難なわけです。だから、この人達を一日も早く救い出し再起の道を歩かせるという事は、相談所や県下七名の相談員だけではとても困難な問題で、何と云つても県民全部、国民全部が温い理解の手をさし伸べてやらねばいけないと思います。」

所長はここで、冷たくなつたお茶をグツと呑みほして話し続ける。

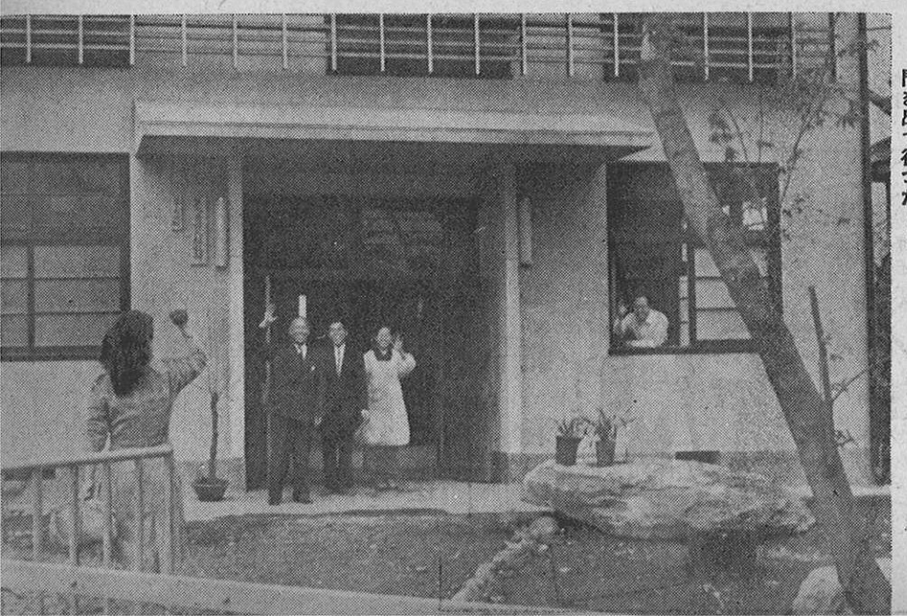
「郷里に帰つた人が、又もとの抱え主の処に舞いもどつ来てた例も少くないのです。前歴を知つた人がいいふらしたり、或は家族や親戚の人達が冷く接したり…特に田舎では周囲の眼が冷たく注がれがちですね。そういつた事が、せつかく更生しようとする婦人達を再び転落の淵に蹴落す事になるのです。」と暗澹たる表情。

県では、こうしてこれら婦人の更生に関係あるあらゆる機関を動員し、あらゆる手段を講じてその再起を扶け励ましている。更生の足場となる婦人ホームの完成も真近い。

だが……紅灯は消えたが、残された問題は大きい。売春婦の更生問題ばかりでなく、暴力の撲滅にせよ、ヤミ売春の絶滅にせよ、これらはすべて私達県民の積極的な協力がなくては極めて難かしい問題である。

私達はこの際、今一度、これらの問題を真剣に――真面目に考えなければならないのではないだろうか。

★……食事は相談員もまかないのオバサンも一緒に……



★……「サヨナラ……」Kさんは手をあげて、新しい出発の門を出て行つた……